

ルター『マグニフィカート』の紹介

滝田 浩之

一 ルターが『マグニフィカート』を書いた時の状況

ルターが『マグニフィカート』を書いた一五二〇～一五二二年は、ルターにとって日々が目まぐるしく変化する時でした。一五一七年十月三十一日に「九十五箇条の提題」を公にした後、ルターは執筆や論争の中で多忙を極めていました。ルターの「人が義とされるのは、律法の行いによるのではなく、ただ信仰のみによる」と考えるからです」（ロマ三章二十八節参照）に立つ主張は、教皇制の否定とも取れる発言へと発展し、ヨハン・エックとの論争によってルターとローマ教皇庁との対立は決定的なものになっていきます。

ローマ教皇庁は、この事態に対して硬軟織り交ぜた対応を取りました。ルターには、自説について説明する執

筆を命じます。これが一五二〇年の『キリスト者の自由』につながります。もう一方では、実は一五二〇年九月頃、ルターの属していたザクセン公国のフリードリッヒ賢公にルターの引き渡しを要請しています。幸い、このフリードリッヒ賢公はルターの味方でしたので、翌年の一五二一年四月のヴォルムスの国会（「我ここに立つ」）まで捕まらないうすみます。

しかしローマ教皇庁も、この間、何もしなかったわけではなくて、ヴォルムスの国会までの間に、ルターに自説を撤回しないと破門すると警告します。この破門の恐れを聞き及んだ一人にヨハン・フリードリッヒという人がいました、この人はフリードリッヒ賢公の甥っ子です。一五二〇年で十七歳です。ちなみにルターはこの時、三十七歳。この甥っ子がルターを大変尊敬しており、叔父にあたるフリードリッヒ賢公にルターを助けて欲しいと願います。ルターは、この甥っ子の行動に大変、励まされました。感謝をするわけです。そのあたりのことを『マグニファイカート』を執筆する動機として、ヨハン・フリードリッヒ宛の献呈辞にルターは書いています。

いずれにせよルターは、ヴォルムスの国会の後、帝国アハト刑に処せられます。これはとても深刻な刑でした。人であつて人でないと言いますか、どこで殺されたとしても殺した人は罪に問われないという、重い刑でした。このような状況の中でフリードリッヒ賢公はルターをワルトブルク城に匿います。ルターがここで新約聖書を翻訳をしたことは有名です。同じ時期である一五二〇年にヨハン・フリードリッヒへ献呈辞の草稿を送付した後、本格的に執筆を開始し一五二一年に完成させました。

二 ルターが『マグニフィカート』を書いた背景

この書物ははっきりと、自分のことを応援してくれているフリードリッヒ賢公の甥っ子の若い十七、八歳のヨハン・フリードリッヒのためにルターが書いたということ、これは大切なことだと思えます。ルターは、将来国を治めることになるヨハン・フリードリッヒが統治者になる時に、信仰を持って、つまり自分より大きな畏れるべき存在があるということを心して統治者になることが大事だと考えました。このことを教えるためにマリアの賛歌に学ぶことがふさわしいとルターは考えて、『マグニフィカート』の聖書講解という形で執筆を行ったのです。ルターは、統治者が、自分より大きな存在を持たないで謙虚さを失ってしまった時に、その統治者は悪魔のようなものだということを言っております。統治者というのは、言ってみれば自らを裁く人はいないわけですから、自分の思い通り、白いものでも黒にすることができ、そういう恐ろしさを持っている。そういう時に、神さまは神の母になるという素晴らしい賜物をマリアに与えているけれど、マリアはそれを自分のものにならないで、そういう賜物を与えてくださった神さまに、ただ感謝するという姿勢を貫いている、ここにマリアの信仰者としての模範の原点をルターは見えていました。ルターは興味深いことを言っております、マリアは神さまの「かえりみ」に感謝しているということが、どれだけ徹底しているか、それはマリアは、たとえ神の子を宿すという役割を神さまが心変わりをされて他の人に与えたとしても、なお、マリアの今の喜びは不変に違いない、そ

ういう表現でマリアの喜びの源泉がどこにあるか、ということに注視しています。

さらに、だからこそ中世において徳の一つとされた「謙遜（フミリタス）」の理解を根本から問い直します。つまりマリアが「身分の低い」とか「はしため」と言っていることは、自分の「謙遜」を救いの条件として提示しているのではないということは極めて重要なこととルターは考えました。「身分の低いこと」や「はしため」であること、あるいは「謙遜」であることは救いの条件には一切ならないのであって、ただ「神のかえりみ」のみがそれをする、とルターは徳としての「謙遜」を真つ向から否定した上で、キリストの救いの深さと恵みを描くのです。

次に、ルターも、大変、このマリアの賛歌に励まされたということにも触れておくことが大切だと思います。『マグニファイカート』はルターの信仰告白だと指摘する人がいます。ルターは、これを書いている時に、フリードリッヒ賢公に匿われています。名前も「ユンカー・イエルク」と変えなくてはならないような切迫した状況でした。ルターの持病は便秘、不眠、めまいなどといわれています。ストレスで体の調子も悪い日が多かったです。このワルトブルク城には、ルターが悪魔に投げつけたインク瓶の跡があると言われています。そこでルターは「自分は洗礼を受けた、洗礼を受けた」と自分に言い聞かせていたと言われます。心が折れているわけです。自分は無価値な人間、取るに足らない存在である、しかし、そういう自分ではあるけれど、神さまは自分のことを見捨てていない。「神のかえりみ」はここまで届いている。マリアに対する神さまの「かえりみ」を見つめることによって、ルターもまた励まされたのです。

実は、これを献呈されたヨハン・フリードリッヒも四十四歳の時に、皇帝に逮捕されて死刑を宣告されます。

何とか死刑は免れますが、地位を奪われて隠居した彼もまた、このマリアの言葉を通して神のかえりみにある自分に気づくことができたのではないのでしょうか。

三 わたしと『マグニフィカート』との出会い

最後に、わたしとこの書物との出会いですが、実は、牧師になって板橋教会が最初の赴任地でしたので、自車で通える立教大学の修士課程を受験いたしました。その時に、研究テーマとして、この書物を取り上げました。選んだ理由は大変不純ですが、この書物が短い！これでした。

ただ、実はこの論文を書いている時に、妻が二人目の子供を妊娠しまして、妊娠して二か月後だったと思いますけれど、子宮頸部ががんが見つかりました。お医者さんはあっさり、じゃあ、来週にでも赤ちゃんはおろして頂いて、お母さんのがんを取りましょうと提案されました。事柄に対するお医者さんの突然の提案は、私たち夫婦にとって大変ショックでした。

私は妻の命が助かればということと話し合うのですけれど、妻は別の方法があるはずだとガンとして聞きませんでした。大喧嘩を毎日しました。むしろ何か手がないかと、宣告したお医者さんと妻は診察のたびにやり合う日々が続きました。結果的にはお医者さんが折れてくださって、子どもを帝王切開で早期出産しても危険の少ないと思われる九か月まで母体については経過観察とすること、出産後すぐに妻のがんを手術という

ことになりました。お医者さんからは、妊娠している状況もあり、妻のがんについては責任を持ってないと言われました。結果的には幸いに母子ともに命が守られたというお話なので、ご心配には及びません。しかし自分の命の危険を冒してまで、与えられた命を守るといふ決意を妻がする姿を見る時に、愛するということ、そして愛されるということの意味をはじめて実感したと言わざるを得ませんでした。

第一ヨハネの手紙四章一〇節に「わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して、わたしたちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになりました。ここに愛があります」と書かれています。これほどはつきり「神の愛」とは何かを語る言葉はないと思います。その愛とは、ご自身と一体であるイエスさまをいけにえとして遣わされたということです。ご自身の命そのものを、私たちが愛するために捧げてくださった。それが「神の愛」である。もちろん、妻は幸い命を落とすことはありませんでしたが、一つの命を守るために、自身の命を危険に置くという姿を通して、私自身は愛されるということは、愛する者の命がかかっているということをお伝えられたのでした。

マリアの語る「神のかえりみ」への感謝の心についてルターは『マグニフィカート』の中で、神さまがマリアの中で途方もなくマグニファイ（大きく）なった出来事だったと語ります。マリアは神さまが顧みてくださるというこの意味を、神さまが自分のために命をかけるほど深く愛して下さることと受け止めた時、マリアの心は神さまで一杯になって、讚美せざるを得なかったのです。妻の姿を通して、神の愛の深さの一面を知ることができたと同時に、マリアの喜びの源泉を深く理解することとなりました。